

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10447

研究課題名（和文）第1子に障がいをもつ児の両親が2児の親となることへの支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a program to support parents of a first child with disabilities in becoming parents of two children

研究代表者

坪田 明子（TSUBOTA, AKIKO）

武蔵野大学・看護学部・准教授

研究者番号：10324691

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：第1子に障がいのある児を養育する母親および父親が2児の親になることへの支援プログラムの開発を行った。すでに次子を迎えた母親および父親の体験および支援ニーズについてのインタビュー結果からプログラムを作成し、次子を検討している親とすでに次子を養育している先輩母親の交流相談会として実施した。結果、第1子に障がいのある児の親にとって、2児の親になることについて考える機会となり、次子を迎えることへの不安や葛藤の軽減になっていた。同時に先輩母親においてもポジティブな影響を及ぼしていた。支援プログラムとして実施した交流相談会は、第1子に障がいのある児の親が2児の親になることへの支援として有効である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障がいのある児の親は、次子を迎えることについて健全な親とは異なる思いを抱いている。しかし、次子を迎えることに関する悩みや葛藤を吐露する機会は少なく、2児の親となることについては身近な先輩母親をモデルとしてイメージするなど、個人の環境に委ねられていることが大きい。本研究の支援プログラムにより、参加者は先輩母親と思いを共有し、2児の親となることをイメージできたり、先輩母親にとってもポジティブな影響を及ぼしていた。専門職者がファシリテーターとなり、これらの機会を設けることは、障がいのある児の親への支援として有効であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：We developed a program to support mothers and fathers who are raising their first child with a disability as they become parents of two children. The program was developed based on the results of interviews with mothers and fathers who had already welcomed a second child and their experiences and support needs, and was implemented as an exchange counseling session with parents who were considering a second child and senior mothers who were already raising a second child. As a result, the program provided an opportunity for the parents of the first child with disabilities to think about becoming parents of two children, and helped reduce their anxiety and conflicts about having a second child. At the same time, it had a positive impact on the senior mothers. The exchange counseling sessions that were conducted as a support program were effective in helping parents of children with disabilities to become parents of two children.

研究分野：医歯薬

キーワード：第2子妊娠 障がい児 支援プログラム 親となる 交流相談会

1. 研究開始当初の背景

新しい家族の誕生は、母親や家族に新たな役割が期待され、家族にとって大きなライフイベントである。第2子を迎える過渡期においても、夫婦は2児の親となることの役割適応を期待される。一方、虐待の研究において、虐待のリスク要因として第2子を迎える経産婦が指摘されており、2児の母親へと役割変化が生じる過程において、母親の適応が困難であることが予測されていた。しかし、臨床において経産婦へのケアは後回しであり、研究においても経産婦の特徴を明らかにした研究は少なかった。そこで研究者は、第2子を迎える夫婦の特徴への理解と支援を考察することを目的に「2児の親となること」をテーマとして先行研究(H18-20科研助成研究)を行ってきた。それらの研究では、経産婦は初産婦の時とは異なる意識及び感情を体験し、初産婦と異なる支援を必要としていること、2児の母親となる役割受容過程には父親の姿勢が大きく影響することが明らかになった。一方、礪山(本研究分担者)は、第2子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムが母親の育児意識に対しポジティブな影響を及ぼし、経産婦に特化したプログラムとして有効であることを明らかにしている。

しかしながら、これらの研究は健全な児の親を対象として妊娠中または産後に行われてきており、障がいのある児の親の次子妊娠・出産に関する研究はほとんどない。障がいのある児を出産した母親は、「期待していた健康な子どもの喪失」と、「自分自身の価値の喪失」を体験している。その過程において出産後の医療者の対応が、支えられた体験としても傷ついた体験としても鮮明に記憶に刻まれており、それらが次の妊娠に対する戸惑いとなることも予想される。また、児の障がいの有無は虐待のリスク要因として指摘されており、より支援ニーズが高い。これらのことから、第1子に障がいのある児の母親および父親は、第2子を迎えることについて、健全な児の親とは異なる葛藤や思いと支援を必要としていると考えられる。

そこで本研究では、障がいのある児を養育する母親および父親の2児の親となることに関する主観的体験と支援ニーズを明らかにし、障がいのある児の親が2児の親になることへの支援プログラムの開発および実施評価することを目的とした。対象者の体験やニーズが明らかになり、支援プログラムが開発されることで、障がいのある児の親の第2子妊娠や出産に対する不安が軽減し、健やかな妊娠・出産を迎えられると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第1子に障がいのある児の母親及び父親が2児の親となることの主観的体験と支援ニーズを明らかにし、2児の親になることへの支援プログラムを開発することである。

第2子を迎える過渡期において、先行研究では対象から外れていた障がいのある児をもつ母親に焦点をあて、妊娠前から、2児の親になることに関する支援となる取り組みを行う。先行研究では健全な児への支援に関して取り組まれているが、本研究で障がいのある児を養育する親への支援が明らかになることで、すべての家族に対し健やかな子育てを担えるための支援ができるようになると思う。

3. 研究の方法

第1子に障がいのある児を養育する母親および父親が2児の親となることへの支援プログラムの開発にむけ、障がいのある児を養育する母親および父親を対象にインタビューを行い、2児の親となることの主観的体験と支援ニーズを分析する。次に、分析をもとに支援プログラムの内容を検討する。プログラムの妥当性を検討したのち、実施評価する。

まず、障がいのある児を養育する母親および父親で第2子を出産した親11名を対象に、半構造的インタビュー実施した。児の障がい特性を考慮し、成長過程で徐々に明らかとなる発達障害児については対象外とした。インタビュー内容は、第1子の育児状況と発育状況、育児関連ストレスと対処法、育児のサポート状況、第1子出産時の体験、第2子妊娠への思い、期待や不安、周囲の反応である。インタビュー実施後に内容を逐語録にし、2児の親となることの主観的体験と支援ニーズについて質的に分析した。

次に、本研究対象者のニーズに即した支援プログラムについて、目的・目標および内容・方法を明確化し、2児の親となることに関する支援プログラムを検討した。プログラム作成にあたっては、内容の妥当性と信頼性を得るために研究分担者および助産学・母性看護学を専門としている研究者、ならびに臨床の助産師の助言を得た。プログラムの評価について検討し、アウトカム測定用具および自由記載を用いた。

なお、インタビューおよび支援プログラムにおける研究協力者のリクルートは、親の会への依頼およびスノーボールサンプリングにて行った。依頼する際に調査の趣旨・方法・倫理的配慮について文書および口頭にて説明して了承を得た。また、研究協力者には、研究協力は自由意志であること、研究協力を途中で中断しても不利益がないことを保障し、得られたデータを本研究以外に使用しないこと、研究結果を公表する際には匿名を厳守することを説明した。なお、本研究は上智大学倫理審査委員会および駒沢女子大学の承認を得て実施した。

4. 研究結果

1) 2児の親となることの主観的体験と支援ニーズ

インタビュー内容を分析した結果、第1子に障がいがあり第2子を出産した親は、第1子出産前から第2子を希望していた。妊娠前および妊娠中において、すでにきょうだいがいる家族から第2子のいる生活にポジティブな印象を受け、第2子を迎えることについてイメージしていた。一方で、第2子の妊娠前から児の障がいの有無への不安や葛藤を感じていた。

第2子を迎えるにあたっては、家族の理解や支援に助けられており、出産後は2児の育児を楽しんでいたが、障がいのある児の通院や療育の負担を感じていた。

また、第1子に障がいがあり第2子を迎えた親は、共感できる仲間の存在が大きな支えになっており、その方たちとの出会いや交流が育児や家族計画においても重要な役割を担っていることが明らかになった。

これらの結果から、第2子を迎えるにあたって、障がいのある子の親だからこそその思いに寄り添う援助が必要であり、出産後においては通院や療育の負担に対する支援が必要であることが示唆された。

2) 支援プログラムの開発と実施

インタビューの分析結果に基づき、第1子に障がいがある母親を対象にした第2子妊娠・出産に向けた支援プログラムの作成を行った。

支援プログラムは、次子を迎えることについての不安や葛藤を軽減することを目標とし、すでに次子を養育している先輩母親を交えた交流相談会とした。開催方法について、当初は対面で実施予定であったが、コロナ感染症の影響により双方向遠隔システムである zoom に変更して開催した。2回開催し、延べ人数は次子を希望する母親3名、先輩母親4名、時間は140~160分/回であった。

相談交流会では、研究者がファシリテーターとなり、参加者らが話しやすい雰囲気になるように配慮した。インタビュー結果から抽出された項目を中心に、障がいのあう児の育児について、第2子を迎えるにあたっての心配ごとや質問、第2子出産後の2児同時の育児状況、障がいのある第1子の反応や影響などについて、第2子を検討している参加者からの質問を話題の中心とし、交流相談会を進行した。また、参加者である先輩母親の許可を得て写真や動画の提供を受けて交流相談会で共有し、すでに養育している2児の普段の様子がわかるように考慮した。

3) 支援プログラムとして実施した交流相談会の評価

第1子に障がいのある児の親が2児の親になることへの支援として開催された先輩母親との交流相談会への参加が、母親にどのような意義をもたらしたかを明らかにするため、交流相談会の評価について参加中の語りと参加後の自由記載をデータとし分析した。参加者らの同意を得て、相談会の語りを録音し、逐語録を作成した。終了後には、参加した動機、相談会の内容に関する感想や意見などを自由記載によるアンケートを実施した。

参加者の語りと参加後の自由記載を分析した結果、参加した母親は、先輩母親に悩みを話し共感してもらえたこと、2児の育児の実際を聞いたことが、次子を迎えることへの励みになっていた。先輩母親は、同じ不安を体験した者として役にたちたいという思いで参加したが、同時に自分自身の振り返りと気づきのある時間になっていた。また全員が、次子を迎えるためにこのような相談ができる場が必要であるとアンケートに記していた。

これらの結果から、支援プログラムとして実施した交流相談会が、第1子に障がいのある児の親が2児の親になることを考える機会として意義があることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 坪田明子, 磯山あけみ	4. 巻 19巻 第2号
2. 論文標題 第1子に染色体疾患がある児の親が第2子妊娠中に出生前検査を検討するにあたり巡らせた思い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本遺伝看護学会誌	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪田明子	4. 巻 第14号
2. 論文標題 日本における出生前検査の現状と影響～いのちに向き合う現場から～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文化研究	6. 最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Akiko Tsubota, Akemi Isoyama
2. 発表標題 Supporting Parents Whose First Children Have Disabilities Become Parents to Two Children: The Significance of Holding Exchange and Consultation Sessions with Senior Mothers
3. 学会等名 The 8th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Tsubota, Kozue Miyatake, Yurika Fujita
2. 発表標題 An exchange conference featuring a speaker with Down syndrome and his sibling: A project that values interaction with participants
3. 学会等名 World Down Syndrome Congress (WDSC) 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Tsubota , Akemi Isoyama
2. 発表標題 The psychology of fathers who raise a child with disabilities and their initiative engagement that helps their children to live their life.
3. 学会等名 The 32th Triennial Congress of ICM (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田明子, 礪山あけみ
2. 発表標題 ダウン症児を養育する親の“次子を授かること”に関する調査
3. 学会等名 第35回 助産学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田明子, 礪山あけみ
2. 発表標題 第1子に染色体異常がある児の親の第2子妊娠中における出生前検査に関する思い
3. 学会等名 第34回 日本助産学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坪田明子, 礪山あけみ
2. 発表標題 第1子に障がいのある児の親の第2子妊娠から出産後に必要な支援
3. 学会等名 第19回 日本遺伝学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坪田明子, 礒山あけみ
2. 発表標題 第1子に障がいのある児を養育する親が2児の親となる体験
3. 学会等名 第19回 日本遺伝学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坪田明子, 礒山あけみ
2. 発表標題 第1子に染色体異常がある児の親の第2子妊娠中における出生前検査に関する思い
3. 学会等名 日本助産学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	礒山 あけみ (Isoyama Akemi) (00586183)	獨協医科大学・看護学部・教授 (32203)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------